オリニックの作品、その不条理性

頭骸骨、彫像、円柱、柱頭、甲冑、アンフォラ陶器 (amphora)、黄金虫 (scarab)、貝殻、種子、扉と階段に見る建築物、図形と文字などなど、パトリシア・オリニックの造形言語は実に多岐にわたっている。これらの要素を構成する文化的、地理的背景にあっても、エジプト、ギリシャ、ヨーロッパ、ユーラシア、アジア等の世界にまたがり、特に限られた文明の象徴に偏るのでもない。このように彼女が好んで取り上げる多種多様なモチーフが、互いに重なり、配置され、それでいて混乱と破たんを見せずにいるのは、まことに不思議としか言いようのない性質の視覚的表現ともいえる。しかしながら、昆虫や鉱物の標本箱 (specimen cases) のように注意深く集められた造形要素のうち、しばしば作品に登場する頭蓋骨の例に代表されるように、おそらくそれらは「死」や「無常感」と深く関わっているように思われる。

考古学的な遺物や装飾品、宗教的なシンボル、建築物とその付属品、原素的な自然物とその形態、これらは今生きているものではなく、多くが過ぎ去った時代のもの、またはいのちを終えたものの形態が取り上げられている。見捨てられた建築物や家具、そして動物や植物のかたちですらその亡きがらが提示されるが、さらに図形と文字がその役割に従って、時間の記録や位置の表示を果たそうとしているかのようである。それは埋もれていた古代の発掘品、書庫に眠る中世の貴重書、ケースの中で永くほこりを被った陳列品、古ぼけて変色した昔の写真などを観る者に思い起こさせる。しかしオリニックの作品は、だからと言ってノスタルジックな雰囲気を伝えるメッセージでは決してない。多岐にわたるモチーフを用いながらも、一種ストイックで静謐な世界を展開する彼女の作品には、つまり人間の不条理を問いかける強い執着心によって引き締められ、独自の表現にまで達しているように考えられる。

１９９０年の春より３年間、パトリシア・オリニックは日本に滞在し、私が指導する京都精華大学芸術学部の版画専攻の研究生として過ごした。彼女の研究テーマは「日本の伝統的手漉き紙の技法と製本に関する研究」であった。自ら作る紙や造形的な側面を重要視した本の形式など、その後の彼女の発表作品に見られる個性的な手法は、この時期における東洋での研究や体験が多く影響しているものと思われる。さまざまな植物から作られる手漉き紙の技法と多彩な紙のテクスチュア、それらを用いた実に多くのの表現形式とスタイル、オリニックが興味を持ったこれらの世界はかなり広範な領域に及んでいたが、それでも彼女特有の鋭敏な感性によって短期間の内に自らのもの、自らの手法と成し得たことは驚嘆以外の何ものでもない。

ドローイングをはじめ、リトグラフ、オフセット、木版などの版画技法、写真製版とデジタルイメージの加工、ハンドメイドペーパー、コラージュ、アッサンブラージュなどに、近年は建築的廃品を利用した立体、半立体のオブジェやインスタレーションが加わり、オリニックの作品はイメージの多様さと正比例して、用いる素材や技法においても複雑であり、また極めてユニークな方法論が駆使されている。
９０年に彼女が京都で制作を開始したとき、そのドローイングの正確さと厳しさに舌を巻いた覚えがあるが、それらはどちらかと言えば醒めていて、解剖図や博物学的な表現、いわゆる優れたサイエンスイラストレーションを見るような感があった。これによってもオリニックの表現が人間の感傷や情緒よりは、行為や事実の記録へと向かう姿勢を見せているかに思われる。そして多種多様なミックスドメディア的展開が、これらの集合と提示にとってことさら欠かせない造形手段であるのも事実である。

オリニックの父が技術者であり、彼女の姉もまた同じく技術者であると聞いている。両人がどのようなタイプのエンジニアであるか、本人に確かめる機会もなく知る由もないが、家族と共通したエンジニア的な血が、オリニックの体内に流れていることはおそらく確実であろう。さまざまな技法や素材にいつも新たな好奇心を湧かせ、それらをこともなげにこなして自身の表現方法に組み込む鮮やかな手腕、さまざまな時代と文化、自然と人間、錯綜したそれらの象徴や記号を明晰な視点によって選び、再構成してゆく手法、いずれの方法においてもエンジニアリングな造形姿勢が、彼女の場合ことの外豊かであるのは間違いない。

オリニックの作品を眺めていると、「なぜわれわれはモノを作ろうとするのか？」と問いかけられているように、ふと考えさせられるときがある。金銀細工のように手の込んだ彼女の仕事は反対にモノ作りの悲哀と無情を強く感じさせるが、と同時に幾重にも重なり合った画面の奥から、過ぎ去った時間を象徴するモチーフや図像が浮かび上がり、さらに観る者を深い不安に陥れているようだ。ただ、これは決してオリニックの意図するところではないとも思われる。しかしながら、人間の不条理と戦わなければならない一人の芸術家の、どうしても避けられない立場と行為の証しを、彼女の作品は如実に物語っているとはいえるだろう。

黒崎　彰
京都精華大学 芸術学部 学部長
芸術学部 造形学科 版画専攻 教授